

### 第三章 戴冠式

一人の家来が、戴冠式の服を持って到着しました。

それらは非常に美しかったのですが、若い王は自分の夢を思い出しました。

「これらの服を持って行け。僕はそれらを着たくない」と若い王は言いました。

「これはご冗談ですか、陛下？」と家来は尋ねましたが、若い王は自分の夢について家来に話しました。

「僕のローブには悲しみと苦しみがあり、ルビーには血が、真珠には死があるのだ」と若い王は言いました。

家来は、「どうか夢のことはお忘れになってください。ローブと王冠を身に着けてください。

民衆は、王冠や王笏（おうしゃく）がないと王様だと分からないでしょう」と答えました。

しかし、若い王は森から持って来た自分の古びたチュニックを着て、自分の羊飼いの杖を手に取りました。

「僕はこれらの服を持って宮殿にやってきて、これらの服を持って宮殿を立ち去るだろう」と若い王は言いました。

「今、僕は自分の戴冠式のための準備ができています」

一人の家来が、「あなたの王冠はどこですか？」と若い王に尋ねました。

すると、若い王は自分のバルコニーからイバラのついた野ばらを取りました。

「これが僕の王冠になるだろう」と若い王は答えました。

若い王は自分の馬に乗って、大聖堂に行きました。

民衆は若い王を見て笑いました。

「これは王様ではなく、王様の家来だ」と民衆は言いました。

若い王は自分の夢について説明しましたが、一人の男は怒って、「裕福な人々が貧しい人々に仕事を与えているということ、あなたは知らないのですか。厳しいご主人様のために働くのは大変ですが、ご主人様なしで働くのはもっと大変です。宮殿に戻って、あなたの戴冠式のローブを身に着けてください」と言いました。

「富める者と貧しい者とは兄弟だ」と若い王は答えましたが、民衆はまた笑いました。

若い王は大聖堂の大きなドアに着きましたが、兵士たちが彼を止めました。

「おまえは何が望みなのだ？ 王様だけがこのドアを通して入ることができるのだ」

「僕が王だ」と若い王は答えました。

司教は若い王を見て、「あなたの王冠はどこですか？ あなたの王笏（おうしゃく）はどこですか？」と尋ねました。

若い王は自分の夢について司教に語りましたが、司教は「私の言うことを聞いてください、私は老人です。世界には多くの悪しき物事がありますが、あなたにはそれらの全てを変えることはできないのです。泥棒や海賊、こじきがありますが、あなたはこれらを失くすことはできません。それらは一人の人間の手には負えないのです。宮殿に戻って、あなたの戴冠式の服を着るのです」と答えました。

しかし、若い王は司教のそばを通り過ぎて、大聖堂に入りました。

彼は祭壇に行き、キリストの像を見ました。

彼はろうそくの光と香の煙を見ました。

突然、たくさんの民衆が大聖堂の中に走って来ました。

彼らは剣を持っていて、とても怒っていました。

「こじきの服を着た王様はどこだ？」と民衆は叫びました。

「私たちは彼を殺さなくてはいけない、なぜならこじきは私たちを支配することができないからだ。彼は私たちの国にとって害悪だろう」

しかし、若い王は祭壇の前で静かに祈りました。

それから若い王は振り返り、民衆を悲しそうに見ました。

その瞬間、一筋の太陽の光が大聖堂の中に差し込みました。

それは祭壇の若い王を照らしました。

太陽は彼の周りに美しいローブを作り、赤いバラが彼の乾いたイバラの王冠に生え、白いユリが彼の杖に生えました。

バラはルビーよりも赤く、ユリは真珠よりも白かったのです。

音楽が演奏され始め、声が歌い出しました。

神の栄光が大聖堂を満たしました。

民衆はひざまずきました。

「彼は、私よりも偉大な誰かによって王位に就かせられている」と司教は言って、若い王の前にひざまずきました。

少年は祭壇から降りて、民衆のそばを通り過ぎました。

しかし、彼らは若い王の顔を見る勇気がありませんでした、なぜならそれは天使の顔だったからです。